

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	松本 祐樹
論文担当者	主 査 小山 英則
	副 査 新村 健
	副 査 鈴木 敬一郎
学位論文名	Urine albumin-to-creatinine ratio on admission predicts early rehospitalization in patients with acute decompensated heart failure (急性心不全患者における尿中アルブミン／クレアチニン比の予後予測としての有用性)
論文審査の結果の要旨	
急性心不全患者の入院時尿中アルブミン／クレアチニン比(UACR)が、退院後 1 年以内の再入院の予知因子となることを単施設、後向きコホート研究により示した論文である。これまで、UACR が慢性期の心不全患者の予後に関与することを示す結果は複数報告されているが、急性心不全入院時の UACR の心不全再入院における意義を明らかにした報告はない。 2017 年から 2019 年に兵庫医大病院に入院した急性心不全患者のうち、UACR を評価していた 140 名を対象とした。Kaplan Meier 解析の結果 UACR 50 mg/g Cr 以上の患者は有意に心不全再入院率が高く、良く知られた予知因子である BNP 824 pg/ml 以上を併用することにより、より予知能力の向上が認められている。申請者らは、急性期心不全における UACR が右房圧、すなわち血行動態的に糸球体内圧上昇を反映している可能性を示し、必ずしも糸球体障害（例えば糸球体濾過率）を反映するものではないと考察を展開している。本研究結果をもとに、現在所属講座では前向きコホート研究、血行動態変化による糸球体内圧を標的とした薬物による介入試験も計画されている。 本研究は、循環器内科学として継続的に取り組んでいる心不全予知因子の開発を担うもので独自性が高く、初めて急性期の尿中アルブミンが心不全予後を規定する可能性を示した、新規性が高い成果である。本コホートが後ろ向き研究で、比較的少人数であること、右房圧と糸球体内圧の関連を規定するメカニズムが不明であることなど、今後の研究に解をゆだねるところは大であるが、心不全発症予防に向けたあらたな治療標的が提案されるなど、今後の研究の方向性に大きな影響を与えた論文であり、本研究の知見は学位授与に十分値すると判断した。	